

しずおか

Shizuoka Junior High School Attached to the Faculty of Education of Shizuoka University

子どもたちと共に豊かな学びを創造する

研修部長 木下 聡美

私たち授業者は子どもたちの今までの学びの姿から、この題材ではこんな姿が見たいと考えたり、新たにこのようなことに気づいて欲しいと願ったりと、子どもの学びの姿を柱にして題材構想をしています。本校の研究では、このような授業者が願う子どもたちの学びの姿を「教科で願う学び」として、研究を進めてきました。

10月に行った研究協議会では、規模を縮小しての開催となりましたが、共同研究者、助言者、協力委員の先生方に授業を参観いただき、実際の子どもの姿から「教科で願う学びとは何か」ということについて協議させていただきました。また、11月の全体研究では数学の授業「桜の開花予想—データの特徴をとらえ一次関数とみなす—」を行い、領域をまたいだ題材構想の中で子どもたちにどのような学びがあったのかということ进行分析していきました。

今年度の授業実践を通して、題材に出会った子どもたちが既習事項と関連づけながら問いを追求したり、追求の過程で生まれた新たな問いの解決に向けて試行錯誤したりしながら、仲間と共に教科の本質にせまっていく姿を見とることができました。そこには私たちが願っている以上の豊かな学びの姿があり、授業者自身が多様な子どものあらわれを見とる目をもつことの重要性が改めて確認されました。

子どもたちは様々な事象・もの・人のかかわりを通して、自分一人では気づくことのできなかった視点に気づき、物事を多様な視点でとらえることの大切さやおもしろさに気づいたり、他者の考えから自分の考え方を見つめ直したりすることで学びをより深いものにしていきます。私たちはそのような子どもたちの姿を見とりながら、教科の本質にせまっていくような豊かな学びを育んでいきたいと思えます。

来年度は多くの先生方に本校の実践を实际にご覧いただき、ご指導・ご助言をいただける機会がもてるようになることを祈るばかりです。今後ともお力添えを賜りますようお願い申し上げます。



『教科で願う学び』の姿を中心にカリキュラムを編む

上智大学総合人間科学部教育学科 教授

講師：奈須 正裕 先生



2021年10月14日（木）に開催されました本校の研究協議会では、上智大学の奈須正裕教授をお招きし、ご講演をいただきました。先生のご講演の概要は以下のようなものでした。

私たちが「教科」で教育をするときに大切にしたいことは、子どもにとって学んだ知識が生きて働くものであるかという視点です。子どもが生きて働く知識を身に付けるには、私たち教師が教科カリキュラムを「網羅」的に組むことをやめ、「看破」的に組む必要があります。「看破」的な学びとは子ども自身が「この学習って結局ここが大事なんだよ」と学問のポイントを発見していく学びです。そのとき教師は、子どもがうっすらと気づき始めた学問のポイントを明示的に整理する役割を担うことで、子どもの学びが深まります。

大切なことは、子ども自身が学問のポイントに気づくことです。そのために私たち教師は、もっと子どもに情報を開示し、もっと子どもに授業を委ねるべきであると奈須先生は言います。教材や知識などの情報を小出しにせず、子どもたちが使いたいときに使えるようにすることは子どもが主体的に学びきっかけになります。さらに、教師が学び方をコントロールするのではなく各々の子どもの学び方を尊重することで、子どもが到達する学びは深まるのです。

子どもがどのように学ぶかについて長年研究を続けてきた本校において、今回の奈須先生のご講演は子どもの学びを支える教師の在り方について考える貴重な時間となりました。



令和3年度 研究紀要が完成しました

研究協議会など本年度の授業実践を中心に、研究の成果と課題をまとめた研究紀要が完成しました。

以下のリンクからご覧ください。



研究書籍のご案内

対話が深める子どもの学び

—「教科ならではの文化」を味わう授業—

明治図書刊 本体価格 2,200 円

本書では、各教科が考える「教科ならではの文化」を味わう授業について、具体的な子どもの姿を通して提案します。本書に関するお問い合わせは、本校研修部まで。書店・オンライン書店等でもお求めできます。



国語科

200字で語る日本の昔話

一言を吟味することで人を魅了する紹介文をつくらうー（第1学年）

「もう一度昔話を読みたくなる」ためのしなやかな読み手意識しながら文章の展開や構成、用いる語句にこだわりながら紹介文の作成に取り組みました。

おくのほそ道ー『曾良随行日記』と比較して読むー（第3学年）

「虚構」を描いたり、誇張して書いたりしたのは、何を表現するためだったのかー子どもたちは批評の視点をもって読み深めていきました。（小野祐一郎・繁田美帆・木下聡美）



社会科

すべての人にとって平等な社会を創るために……

ー性の多様性から考える人権ー（第3学年）

「LGBTQってなに？」なんとなく知っているLGBTQの人々が抱える問題や難しさについて考えるところから授業は始まりました。現実を知った子どもたちは法律を根拠としながらLGBTQの人々を守る方法を追求し、さらにLGBTQの人々だけでなくすべての人にとって平等な社会を創るために大切にすべきことについて語り合いました。今年度の授業では、社会的事象を自分事として捉え、本質に迫る語り合いが多くなされました。（望月慈希・勝又悠太）



数学科

折り紙で考える角の三等分線の証明（第2学年）

作図することが不可能でも、折り紙を使うと全員が折ることができた任意の角の三等分線。子どもたちは、「本当にこの折り方で角の三等分線が折れているのか」という疑問を抱き、証明に挑戦していきましました。折り紙を使って試行錯誤したり、既習の図形の性質に立ち返りながら根拠を明確にして証明したりするなど、題材に没頭する子どもの姿を多くの場面で見ることができました。（安濃勇太・菊野慎太郎・杉山元希）



理科

未知の白い物質（第2学年）

未知の白い物質は、加熱すると完全消失する「炭酸水素アンモニウム」という粉末です。粉末が消失した原因は状態変化して気体になったからなのでしょうか、それとも化学変化して気体になったからなのでしょうか。子どもたちは自然の事象・現象の本質を見定めようと現象をよく見つけて様々な実験と議論を重ねて追求していきました。本年度の授業ではこのような「科学のまなざし」をもった子どもの取り組みをたくさん見ることができました。（井出祐介・高橋政宏）



音楽科

民族音楽をもとにしたリズムアンサンブル

ーインドネシア「ケチャ」ー（第2学年）

バリ島の伝統音楽である「ケチャ」の特徴について考え、オリジナルのリズムアンサンブルを創作しました。今までなじみのなかった異国の音楽を擬似的に体験することで、音楽の特徴や音楽文化の多様性を感じることができました。「ケチャらしさ」について追求し、リズム・音色・音の重なり方等を工夫することで感性を働かせながら、音や音楽に向き合うことができました。（兵庫廣多）



美術科

附中ポスタープロジェクト

ー附中の魅力を外部に発信しようー（第2学年）

校長先生から「附中の魅力を発信してほしい」という依頼を受けた中学生デザイナーたちが、ポスター制作を通して「伝えるデザイン」を追求しました。依頼人の思いとターゲットの気持ちを意識しながら対話や試行錯誤を繰り返し、題材の終末では、「普段何気なく見ていたCMや広告の見え方が変わった」「客観的な視点と細部までこだわり抜くことの両方が大切だと気づいた」など、自分たちの学びについて語る子どもたちの姿が見られました。（萩原彰彦）



保健体育科

3x3ーシュートチャンスを生み出すためにー（第3学年）

東京オリンピックで新競技として追加された3x3。子どもたちは、なぜゴールチャンスを生み出すことができるのかについて「フリーになる」ことに視点を、仲間と思考し、体現を繰り返しました。3x3だからこそ、一人一人の役割が明確になり、フリーをつくり出す動きを組み合わせることであみ出せる戦術について追求することを楽しんでいました。本授業では、このように「新たな視点を得ることができる」子どもたちの姿が多く見られました。（勝野由志雄）



技術科

「自在棚」の開発

ーQCDの視点から、ものづくりを考えるー（第1学年）

自在鉤の原理に注目し、その仕組みを生かした可動式の棚「自在棚」の開発をおこないました。Quality（品質）、Cost（費用）、Delivery（納期）の三つの視点を大切にしながら、試行錯誤を繰り返す中で、「妥当な価格、納期までの時間を意識していくことで、よりよいものがつくれた。」「買い手がどのようなものを求めているかで、どの視点を大切にすべきかわ変わってくると思った。」など、技術を多様な視点から評価していく姿が題材を通して見られました。（松原佑）



家庭科

お弁当箱につまっているものから考える消費行動

（第1学年）

お弁当にかかわる人たちの思いを探ることを通して「気持ちのバトン」や「思いのリレー」を見いだしました。それを受けとった子どもたちが消費者として大切にすることを考えると、食べる場面や購入する場面に限らず、調理や献立作成、保存、廃棄に至るまでの様々な場面の具体的な行動が挙がりました。これから相手も自分も社会も豊かになるような消費生活を自分たちでつくっていく姿を期待しています。（堀池美衣）



英語科

“For me”を“For you”にするスピーチ（第3学年）

聴衆とのよりよいコミュニケーションについて考えながらスピーチを作り上げることを通して、子どもたちは「伝える」ということに様々な角度から向き合いました。また、話し手と聞き手の両方の立場でスピーチの場の雰囲気をつくりあげることを通して、コミュニケーションにおいては「思いを伝える力」だけではなく、「思いを受けとる力」も大切であるということに改めて実感することができました。本題材を通して仲間の思いを知ることと自分の思いや考えを届けることに価値を見いだした子どもたちが、「言語的にも情緒的にも豊かなコミュニケーション」で世界の人々とつながっていくことを願っています。（池田卓弥 植木さつき 小池智美）

